

響をあたえることがわかった。V 添加鋼が耐剥離割れ性に優れる理由は、微細析出物の効果により室温付近での水素拡散係数が減少し水素固溶量が増加するため、高温高压水

素状態から冷却中の母材から肉盛溶接境界への水素の濃化量が通常組成材に比べ低いためであると結論された。

会員には「鉄と鋼」あるいは「ISIJ International」のいずれかを毎号無料で配布いたします。「鉄と鋼」と「ISIJ International」の両誌希望の会員には、**特別料金 5 000 円**の追加で両誌が配布されます。

訂 正

「平成 2 年鉄鋼生産技術の歩み」(鉄と鋼, 77 (1991) 1, p. 3) p. 5 本文右欄上から 8 行目に、誤りがございましたので、次のとおり訂正させていただきます。

(誤)
燃料比 412 kg/t

(正)
燃料比 483 kg/t

● 編集後記 ●

編集子にとっても二十数回目の春の学会が巡ってまいりました。心機一転、新しい仕事に臨まれる方も多いと思います。

論文の編集に携わらせていただき今までなにげなく見過ごしてきたことがいかに多かったか改めて学びました。著者が全力投球で書かれた原稿を拝見するたびに、いかに査読はあるべきか自問しています。論文と詩を比べるのはいささか見当違いであるかもしれませんが、三好達治氏が「詩を読む人のために」の前書きで、“心を柔軟にして精神を平らかにして、さまざまな詩人のさまざまな作品に虚心に従ってゆくことは何と楽しい遍歴でしょう。”と述べています。

論文原稿を査読する際にも斯くあればと思います。が、著者名、所属機関等の事前情報のため虚心になれず、偏見あるいは独断による判断が介入しているのではないかと反省しています。原稿の査読は、著者と査読者とのキャッチボールであり、繰り返すことによっ

てコントロールが良くなるのが理想であろう。時にはサインの読み違いはあるものの、大半の原稿は論文となり、知的財産として社会に蓄積されていくのが現状です。従って、査読は著者の思想が客観的に受け入れられる情報として、かつできるだけ早く出版されるために必要、不可欠なものである。

それにもかかわらず、論文の書き方については多くの出版物が出回っていますが、査読についての心構え等について書かれたものはついぞ見たことがありません。恐らく各学会にはマニュアルがあるのですが、非公開扱いになっているためか、誰もがお目にかかることは無いのでしょうか。それらについて一度比較してみたいものだと思います。同じ論文が A 誌では拒否されたが、B 誌では受理された理由がわかるかも知れません。

(K.I.)